Spirited away

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｐｉｒｉｔｅｄ　ａｗａｙ

【Ｎコード】
Ｎ４５７３Ｆ

【作者名】
光差す海

【あらすじ】
厳しいＩＴ業界で働いた吉永祐輔は心の病に苦しんでいる。ある日、ゲームを買いに行ったアキハバラで易者の水晶玉を覗き込むと・・・・・。宮崎駿の「千と千尋の神隠し」のオマージュですが、主人公も舞台も内容も完全オリジナルです。日々に疲れた貴方に是非読んで欲しい作品です。生きる希望のよすがが見つかるかも知れません。

第一章　アキハバラ

今日もアキハバラは人通りがすごい。吉永祐輔は額の汗をぬぐいながら、ここへ来るのは慣れているとは言え、人波に揉まれるのは苦手だ、と改めて思った。人ごみをかき分け歩き、目的の店に到着するとほっとする。だいぶ汗をかいたので、ハンカチで顔を拭きながら、今日発売で心待ちにしていたあの商品を探す。夏の終わりにその商品の発売を知ってから待つ事ニヶ月。昨日の夜は楽しみでまんじりともせずに過ごし、インターネットで繰り返しパッケージ画像を見て想像を膨らませて笑みなど浮かべていた。

祐輔は今朝の八時半には家を出発し、急ぎ足でアキハバラにある、ここ「強烈ノクターン」なる名前のＰＣソフトの量販店へ買いに来た。買おうと思っているのは「あの娘と作ろうメモリアル２」と言うゲームだ。一作目の続編と言う位置になるゲームなのだが、祐輔はその一作目にハマりまくった。ゲームの中に出てくる全ての女性を彼女にする事に成功した。いわゆる、恋愛シミュレーションゲームなのだが、未成年には刺激の強い描写も多くて、それがまた大層気に入った。あのメモ２の続編の紹介サイトで見てみると、表現はさらに過激になっているようだ。人気ゲームだけに目立つところにおいてあるだろう、と思い店内中央の特設コーナーに足を運ぶ。

あるある、でかいポスターがワゴンの上にかざってある・・・・・・あれっ？祐輔は一瞬息を呑んだ。嫌な予感がした。ワゴンが空っぽなのだ。売り切れ・・・・・・かよ。思わず時計に目をやると開店から十分程度しか経っていない。レジに目をやると、お客さんが列をなしている。誰もが片手に「あのメモ２」らしきゲームを手に

持っている。しまった、なら他の店に行くしかないか、と祐輔は慌てて店を出た。人ごみを縫うようにすり抜け、滅多にないことに小走りまでして、息を切らせてヨシバカメラに飛び込んだ。なぜだか知らないが、こういう店はＰＣ関連商品は大体上階に置いてある。うずうずしながらエスカレーターに乗る。もどかしい。五階について、目を左右に配らせ必死に「あのメモ２」を探したが、またもや品切れで、レジには案の定祐輔と似通った雰囲気のお客さんの長蛇の列だ。こいつらめっ・・と思ったが後の祭りだ。まだアキハバラには幾らでも電化製品店はある、パソコン関係の店こそがメインの街なのだから、と思い、片端から店を見て回った。

が、想像を絶する事に、全ての店で売り切れていた。祐輔の落胆はただ事ではない。アキハバラ中を歩き回ったので、時間も午後一時を回っているではないか。・・・・・・しょうがない、他の場所へ移動・・・・・・いや、アキハバラですら売り切れまくっているのに他のもっと入荷数の少なそうな店に今更行っても・・・・・・甘かった、と思った。しょうがない、何日か待つ事になるだろうが、ネット通販で買うか、などと考え、秋晴れの中、祐輔はとぼとぼと帰り道を歩き始めた。その時、

「お兄さん。お待ちなさい」

と声をかけられた。誰だ？と声をするほうを見ると、易者のような羽織袴を着たお爺さんが、水晶やらを並べた小さなテーブルの後ろに座って、こっちを見て手招きしている。占いには興味ない、と無視しようと目を逸らすと、

「欲しいものが手に入る場所がここにある」

と言う。ここ？と心の中で反復すると、一瞬話を聞こうかと思ってしまったが、俺の雰囲気を見て当てずっぽうで言っただけだろう、と思い直し、

「占いはいいよ。」

とだけ返事し、行こうとした。

「ここにあるのにどこへ行く気じゃ？」
と、易者は不思議そうな顔で聞いてくる。
「ここって、何が？」
「お前さんの欲しがっているものじゃよ」
祐輔は二、三歩爺さんに近寄った。彫りの深い二重の持ち主だ。外人とのハーフか何かだろうか。その瞳には何かしら、人を捉えて離さない奥深さがある。
「俺が、欲しがっているものがわかるの？」
「わかるとも。『あの娘と作ろうメモリアル２』じゃろう」
と言って易者は手元であのメモ２らしきゲームをひらひらさせた。思わず祐輔は驚いたが、やがて、ははぁーっ、この爺さん、あのメモ２を何個か買っておいて、俺みたいなのにカマかけて、欲しがったら定価より少々高く売りつけて小銭稼いでるのか。なかなかずるい商売だな。爺さんは屈託のない笑顔を見せている。祐輔は、定価の一割り増しぐらいまでなら買おう、と決心し、歩み寄った。
「爺さん、買うよ。幾らなんだい？」
と聞いた。確か定価が六九〇〇円だった。なら、七五〇〇円までは出そう。
「いやいや、ただであげるとも。ただし、条件がある。」
ただ？ただでくれるわけがない。
「条件って何？」
祐輔はもう腰が引けている。クスリを運べ、とかオレオレ詐欺用の振込口座用に名義を貸せとか言われるんじゃないだろうな。
「この水晶を見てくれ。一体見えているのは何じゃと思う？」
と、言われて、祐輔は思わず水晶を覗き込んだ。グニャグニャと景色が歪んで詰まっているように見える。その時、祐輔の体も歪んだ気がした。
「うっ！？」
す、吸い込まれる！

第二章　レイバーの塔

祐輔は意識を失っていたらしい。ふと目を開けると、腰に痛みを感じた。それもそのはず、腰の下はごつごつとした岩だった。辺りが異様な雰囲気だ。空は灰色の曇天で、雲間から指す太陽はいやに濃い橙色だ。ここはどこだよ？祐輔は辺りを見回す。視界に入る限り、ほぼ荒野だ。左手には鬱蒼とした森が茂っている。今いる場所は勾配を下りきった山なりのふもと、と言う感じだ。足元は岩場で極めて悪い。スニーカーの紐がほどけているので直すと共に、持ち物を確認した。リュック、携帯、財布などはみな無事だ。携帯を取り出してみたが、電波は入っていない。

参ったな。確か、俺は変な爺さんからあのメモ2を買おうとしてたんだっけ・・・・・・。記憶を辿るが、そこまでしか思い出せない。取り合えず、ここがどこなのか、もう少し高い場所に行ってみるか。ここは日本なのだろうか？小腹がなるものの、さほどの空腹感でもない。と言う事は、気を失っていたのは長い時間でもないのかな。よたよたと坂を少し上っただけで、展望がぐっと開けた。森の向こう側に、なんだか分からないが、褐色の塔の先端のようなものが見える。そして、何か飛ぶものがゴマ粒のように見える。少なくとも、あそこまで行けば人がいるかもしれない。でも、何だってこんな事になっちまったんだろう？祐輔は情けなくなってきた。元来歩くのも好きではないし、運動自体好きじゃない。案の定、岩が連なる下り坂で足元をとられて、前に吹っ飛んでこけた。痛い。ズボンごと膝をすりむいた。こんな経験自体、もう十数年ぶりだ。祐輔は今三十三歳。プログラマーの専門学校を出た後、ＩＴ関連のプログラム会社で働き続けていたが、余りのサービス残業と過酷な締め切りの果てに、鬱病になってしまい、半年ほど前に会社を辞めた。両親は理解してくれたが、毎日家にいて何も動き出せない祐輔に、

そろそろ困惑しているところで、それはやはり隠していても本人にも伝わる。医者にも通っているが、現状は薬を飲んでゆっくり静養するしかありません、と言われていて、どうにもならない。だんだん現実逃避がひどくなってくるし、体重は増えてくるし、友達も減っていくし、で自信を失っていく、と言う悪循環に陥っていたのだった・・・・・・。

ともかく、足場の悪い岩場を抜け、どんよりとした森の前に辿り着いた。まさしく樹海のごとくであり、とても入り込む勇気がない。方角を見失い、抜けられなくなるかもしれない、との恐怖が襲った。その時、森の中で何かが動くのが見えた。とっさに近くの大木に身を隠した。そっと顔を出した祐輔の目に映ったのは、三匹の二足歩行をする、めいめい脇に薪を抱えた、祐輔と背丈の変わらないプテラノドンであった。彼らは仲良く歌いだした。

今日の　労働　なし終えて　食べる　サイケラ　美味のきわみ
明日の　労働　気にしない　されば　開かん　夢のとびら

森を完全に抜けると、祐輔には一切気づかず、その背中の大きな翼で飛び立った。ブァサブァサという羽音を鳴らし、森の上を抜けて飛んでいった。何？今の？ぬいぐるみか？放心状態で大木の裏で立っていると、また何かの気配がする。注意して覗き見ると、今度は巨大なモンシロチョウと青いガーネットが手をつないで歩いてくるではないか。祐輔は腰を抜かした。チョウチョと花に足がある！よく見れば顔も人間っぽい。二人？のうちのガーネットがこちらに気づいた。祐輔の血の気が引いた。気づかれたぞっ、逃げなきゃ、と思ったが足が全く動かない。向こうを見ると、こっちにやってくるではないか。どどど、どうすれば、と震えていたが、二人はその目の前を、祐輔に目もくれずに普通に通り過ぎた。青ガーネットが通り過ぎる時、甘い花粉の匂いが鼻に飛び込んできた。一体なんな

のだここは。祐輔はお約束のようにほっぺたをつねってみた。思い切り痛い。夢ではないらしい。

その刹那、大空から何か飛び降りてきた。目の前に下りてきたのは、スズメバチが、やはり人間並みの大きさに化けた代物だった。祐輔をじっと見つめ、

「こわがらなくてもいい。」

と話した。祐輔は震え怯えながら、

「に、日本語を・・・・・・」

とだけ言った。スズメバチは、顔の部分はやはり人間に近い雰囲気なのだが、ほぼ無表情のまま言った。

「迎えに来た。行こう。」

とだけ言って腰が抜けて立てない祐輔の後ろに回り、四本ある手で八十ｋｇ近い体を抱き上げ、ひょいっと飛び立った。祐輔は旅客機にこそ乗ったことはあったが、それより小さな機体で空を飛んだ事はない。たちまち森を上から見下ろす高さに舞い上がった。背中の羽はブィィィインと小さな音を立てている。恐怖にほとんど目を閉じていた祐輔だが、時々どこへ向かうのか、だけは確認したくてチラチラ目を開けた。どうも先ほど確認した褐色の塔のほうへ向かっているらしい。やがて、その塔の全貌が明らかになってきたと同時に、その周りを街が囲っているのもわかった。褐色の塔からは、虫のようなものや、鳥、コウモリ、その他確認できないが、色んなものが飛び出したり、戻ったりしているのがわかった。塔は非常に高く作り上げられているようで、階層は相当あるんじゃないか、と思われた。その中間層ぐらいの四角な穴に、スズメバチは祐輔と共に入った。途端に、ガンゴンと激しく何かが打たれる音が耳に聞こえた。降ろされると、右手に油ですすけたようなカウンターがあって、そこにタツノオトシゴだろうか、と思われる、やはり擬人態の生き物が待ち構えていた。顔が、さっきのスズメバチと似ている。似ていると言うか、マネキンの顔のようだ。整っているが人間味に

欠ける、と言おうか。
「はいようこそ、ユウさん。まずはここにサインを」
と、ぼろいノートにボールペンを載せられる。
「ちょ、ちょっと待ってください。一体ここはどこなんですか。それに・・・・・・」
祐輔には何がなんだかわからない。大体お前らは何者だ。
「サインしないならミンチにして食っちまえうだけだぞ？」
とタツノオトシゴが言う。気づくと、カウンターの奥の扉からゴリラ、ゾウ、それにコイツは恐竜最強のＴ－ナントカじゃないか、の三人が、怖い目をして立っている。ともかく、ボールペンを握った。ユウとの名前欄の横に「鉄筋打ち」とだけ書いてある。
「てて、鉄筋打ちの仕事を僕が？」
「そう。そこの隣の作業場でやってもらうよ。飯つき、寝床つき、それになんと日曜は休みだ。最高だろ？」
と、タツノオトシゴはキョキョホと笑った。海底の生物はこんな風に笑うのか？もう知らない、これは悪い夢だ。鉄でも何でも打ってやる、とやけくそになって「吉永祐輔」とサインした。
「そのリュックは預かっておくよ。お前の寝床に持っていっておくからね」
と、タツノオトシゴは言った。さっきのコワモテ三人は奥に帰っていく。
「じゃあ持ち場に案内してやるからおいで」
と、茶色いスルメみたいな色のこの男が先に立って歩き出す。よく見たら蝶ネクタイなどをしている。不思議と誰もが二足歩行で、人間っぽい顔を備え、日本語を話す。超壮大なドッキリ番組じゃないかこれ？そんな事を思っていると、立て付けの悪そうな木造の扉が開けられた。たちまち大騒音に包まれる。
広い。奥行き１００ｍはありそうな部屋で、異形の人間と言うか、擬人体の動物や昆虫がそれぞれ持ち場で熱された棒や塊そのものを

激しく打っている。室内は異常に暑い。誰も祐輔には一瞥もくれない。熱い！と思ったら何か破片が飛んできたらしい。ほとんど一番奥に案内されて、しばし待つと、カブト虫が大きな台車を押してやってきた。

「カブスや、これはユウだよ。今日からお前の持ち場につけるからよろしく頼むよ」

「はいな。俺はカブス、よろしゅう」

と挨拶をされたので、吉永です、よろしくお願いしますと一応挨拶したら、タツノオトシゴに

「おい。お前はユウ、だ。ユウと名乗れ」

と睨みつけられた。怖いので、わかりました、と言うと、微笑んで去っていった。

「おいユウ、早速だが、あそこのテーブルに積みあがっている鉄棒あるだろう。」

指さすほうを見れば、何本かの鉄の棒が大きな鉄のテーブルの上に並べてある。

「あれを俺らは台車に積んで、奥のエレベーターまで運ぶんだ。そっから先は別の奴が一階の倉庫まで持っていく」

なるほど、あそこの鉄の棒をこの台車に積んで運ぶんだな？祐輔は台車を押して、鉄のテーブルに近づいた。「ぬはっ！」と思わず声が出た。一本が重い。台車に載せるだけで一苦労だ。カブスは台車のハンドルにもたれて見てるだけだ。とにかく、なんとか五本降ろした。

「ついておいで。こっち」

とカブスは楽々台車を押していく。作業者たちの横を抜け、押したら開く観音開きの扉をそのまま出た。廃工場の如き乱雑さに呆れると、足を飛び出ているガラスにぶつけて泣きそうになる。

「狭いから気をつけろよーぅ」

もっと早く言ってくれ。などと思いながら通路を行くと、エレベーター前に、なんと人間が一人と、猫じゃらしか？そんな感じの草

人間がいた。金髪青い目の白人じゃないか。普通の人間もいたので少し嬉しかったが、相手は特に何も感じていないようだった。
「こっちの台車に移して」
とカブスが言う。また、苦労して五本を移すと、金髪と猫じゃらしは二人でエレベーターに乗り込んでいった。開いた台車はまた祐輔が運ぶ。作業場に戻ると、こんどはあっちのテーブル、と指示される。そこには拳骨大の何かの留め金のようなのが山ほど積んである。
「この籠を使う」
とカブスが後ろの棚から何個かの鉄籠を渡してくる。それら一個一個に、その留め金を入れて、台車に積めるだけ積んで、また祐輔が運ぶ。おいおい、このカブト虫さっきから何もしないじゃねーか。と、内心思ったが、何を言えばどんな反応が返ってくるかもわからないし、取り合えず言われたまま動くしかなかった。

延々一時間はそうして言ったり来たりしただろうか。大概疲れて汗が出てきた頃に、
「キューウケーイ」
の声が響いた。
「休憩。こっちの部屋で15分休憩」
と手招きしながらカブスが言う。台車をそこにおいて、後をついていく。作業用のエレベーターと反対に通路を歩くと、大きな部屋があって、無地の絨毯が敷き詰めてある。そこへ、次々と作業者が入ってくる。祐輔は改めて悟った。ここには有史以来の全ての生物がなぜかわからないが擬人化されてやってきているのだ、と。体の大きさが基本的に人間の大人クラスなのもなぜか知らないがお決まりらしい。だから、恐竜たちは着ぐるみに見えてしまう。一方、アリだのテントウムシだのは巨大化してて少々恐ろしい。救いは、顔も擬人化されていることか。顔つきがあのままでは生理的に恐怖を覚えてしまう。祐輔はそんな事を考えながら、隅っこのほうで、何

もせずにいた。
「おい」
と横のイノシシが話しかけてきた。
「お前新入りか」
「はい、そうです」
「名前は？」
「ユウです」
さっきのやり取りを思い出して、そう名乗っておいた。
「俺はシシオウだ。お前な、いい事教えておいてやる」
「なんでしょうか？」
「重いものは腰で持て。腹に力入れろ。じゃないともたねぇぞ。グフフ」
祐輔のへっぴり腰を見ていたのだろうか。恥ずかしくなったが、同時に感謝した。
「ありがとうございます」
「あそこの水は誰でも飲めるから飲んで来い」
流し台の横に、確かに水の出る機械が置いてある。置いてあるコップを使って一気に二杯飲んだ。うまい。水がこんなにうまいとは。と一人感慨に浸っているうちに、
「キューケイオワリー」
との合図だ。カブスが尻を叩いて
「後3時間足らずだ。いこか」
と言ってくれたのはいいが、まだそんなにあるのかと思った。そこから先は、とにかくまず今日の仕事を終わらせて、何が一体どうなっているのかを探らねば、との思いだけで耐え抜いた。暑いのでとっくに上着を脱いでシャツ一枚になっている。出っぱったお腹が見苦しい気がしたが、そんな事言っていられない。
とにかく鉄棒やら部品やらをひたすら運んで、ふと時計を見ると言われた時間を越えている。が、全然作業は終わりそうもない。カ

ブスが
「あー今日も残業かなぁ」
などと言っている。勘弁してくれ。と思っていると、女性が
「みんなごめんねー今日も残業でーす」
と言う声が聞こえた。女性もいるのか、と思ってたら、こっちに来た。驚いた、日本人の女性だ。しかも若い。しかも飛び切りの美形じゃないか。目は綺麗な二重、鼻は高く、唇は引き締まっている。ただ、少し口角が上がっていて、冷たそうな印象も受ける、などと考えていた、と言う事は、その間ずっと彼女を見つめていたと言う事だ。途中から女性もその視線と祐輔の存在に気づいていた。
「何か？」
と言われ、我に返った。
「い、いえ、そ、その」
祐輔は生来女性に縁が薄く、女慣れなど全くしていない。挙動不審になった祐輔に対し、女性は
「悪いわね、初日だろうけど残業してね」
とだけ言って向こうへ歩いていく。着こなしているスーツは目の覚めるようなブルーのスーツで、作業場に来るには余り似つかわしくない、と思った。黒髪が肩まであり、その匂いがこちらにまで香ってきた。
「おい、続きだ」
とカブスに言われ、慌てて鉄棒を持ち上げた。

結局作業はその後一時間半ほども続いた。
「今日はオワリーお疲れ様ー」
との声で、みな一斉に作業を止めて、後片付けを始める。カブスは台車を直すと、
「上がろうか。あそこの出勤表にサインして終わり」
と祐輔を伴い、ぞろぞろと並ぶ列に入り、サインを済ませると、いったんここの責任者のタツノのところへ行けと言う。そこで、横

手のさっきの扉を開けると、カウンターには誰もいない。仕方ないので待っていると、スズメバチやクマバチが入ってくる。と、さらにオオワシみたいなのが入ってきた。擬人化したキツネを抱いている。あー、こいつも俺と同じく迷い込んだのかな、と思っていると、タツノが出てきて、またサインをせかしている。キツネはとまどっている。タツノが同じ脅しをかけ、またさっきの三人トリオが出てきた。思い出した。あいつはＴ－ＲＥＸだ。キツネが、

「なんだかわからねぇよ。ここから出してくれよ」

とごねた。途端、ゾウの鼻が伸びた。持ち上げて、そのまま裏の部屋に消えていく。タツノはノートに赤線を引いている。

「一匹削除、と」

祐輔はぞっとした。あの時もう一言でも逆らっていたら、俺もあのゾウにパワフルノーズブリーカーみたいな残虐な技を食らって背骨辺りを折られて、ブッ殺されていたに違いない。

「ユウ、お待たせ。さ、寝床に案内するよ」

とタツノが何事もなかったようにキョホホと笑う。連れられて奥の廊下へ進む。この塔の内部は基本的に暗い。エレベーターがあるんだから、電気も通っているのだろうが、今廊下についているのは灯油ランプそのものだ。円形の構造なので、廊下は基本的にカーブがかかっている。そのカーブを歩くと、ちょうど休憩所の真反対ぐらいの場所に位置するだろうか、中に入ると、２段ベッドが山ほど並んでいて、そこに、おそらくさっき一緒の作業所で働いていた連中が帰ってきていた。「寝床」と言う言葉に嫌な予感はしていたが、まさにタコ部屋だな、と祐輔は肩を落とした。

「あ、あのう」

「なんだい？」

「シャワーと言うか、お風呂はありますか？」

「ああ、あるよ。あの奥にね。タオルも石鹸もサービスであるから遠慮なくつかうがいいよ。後、食事は向こうにあるドアから食堂がある。一日三食ただだよ、夢のようだろう。キョホホホ」

違う意味で夢のようだよ、と思ったが、取り合えずハイとだけ返事しておいた。
「ここの上がお前さんのベッド。週に一回は干してあるよ」
見れば紙に「ユウ用」と書いて貼ってある。さらに、下のベッドを見れば、そこには「ネキ用」とある。と思った瞬間、タツノがそれをひっぺがした。
「後は分からない事があれば周りの人にお聞き」
とだけ言って行ってしまった。まだまだ分からない事だらけだ、と大声で怒鳴りたくなったが、命が惜しいのでやめて、取り合えず二段ベッドのはしごを上がった。靴下でも脱ぐか。脱いだ靴下がとても臭かったが、こんな風に靴下を汚したのは一体何ヶ月ぶりだろう、と思った。

ともかく、今日は仕事は終わったようだ。みんなは、どうもお風呂に向かっているらしい。さっき教えられた奥のほうの部屋へぞろぞろと向かっている。祐輔も、汗で汚れた体を洗おうと、二段ベッドを降りた。ふと気づいた。着替えが無い。みんなはと言うと、ほとんど誰も服を着ていない。いわば全裸だが、動物も植物も昆虫も魚介類も恐竜ですらももちろん服など必要ないわけだ。だが、さっき金髪の人間もいたし、スーツの女性もいたのだから、洋服の代わりはあるにはあるだろう。ちっとも気が進まないが、さっきのタツノのところに聞きにいくしかないか？でも何か分からない事があれば周りの人に聞けといっていたっけか。ともかく、浴場を覗いてみると、思った以上に広い。めいめい桶を持っていて、脱衣することなくどんどん入っていく。ふと見ると、入り口の横にシャツやら靴下やらタオルやらが数人分用意されている。これを使ってもいいのだろうか、と思って逡巡していると、ナスビが
「それは人間と一部の服が必要な生き物用。着ればいい」
と親切に言ってくれた。
「あと、中には石鹸とかシャンプーは備え付けてあるよ。持ってな

いんだろう。俺には入浴の習慣はなかったけどね。風呂は好きになったな」
　と、ナススと笑った。それぞれがどういう笑い声を上げるか知るだけでも面白そうだ、とか祐輔は思った。ともかく、ならばタオルだけを持って、服はタオルやらを入れてあるバスケットの横において、浴場の中に入った。百人近くがごった返して湯船に使ったり体を洗っている。いつ以来だろうか、こんな大集団と風呂に入るのは。目の前でヒトデが体を洗っている。真っ赤なのは元からなのかのぼせているのか。確かに、それぞれの椅子の前に石鹸とシャンプーらしきものが据え付けてある。念入りに体を洗う。中途半端で何か文句を言われたら怖い。体と頭を洗い終わったので、湯船に入った。途端に、後ろから頭を小突かれた。
「おい人間。海にゴミを捨てるな」
　振り返ると、明らかに人食い系のサメだ。ジンベイザメか何かか。
「す、すみません」
　と謝る。
「お前らの捨てた空き缶を飲み込んだ事があるんだぞ。おかげでフン詰まりになって痛かったんだぞ」
　平謝りしていると、横のジュウシマツみたいなのが
「僕は住んでいた木を人間に切り倒されて引越しをした。その時に妻が産んだタマゴも潰れて子供が5人死んだ」
　とだけ言われたが、彼はそれだけしか言わなかった。すると、今度は前に移動してきた真っ赤なトマトが、
「どうでもいいのですが、強烈な農薬をかけるのは臭いので止めてくれませんか」
　と言ってくる。返事に窮していると、斜め後ろからトリケラトプスみたいなのが
「そう全部全部兄ちゃんに言ってもなぁ」
　と合いの手を入れてくれた。すると横のジンベンザメが
「お前は人間と暮らしたことが無いから言えるんだぁー」

と大きな口を開けて怖い顔で言った。が、どこかユーモラスな雰囲気であったので、それで話は終わった。

生きた心地もしないので、祐輔は早々風呂を出た。ともかく体はすっきりしたものの、緊張はほぐれない。おそらく、ここにいる色んな生物も、あの易者の魔法みたいなものでここに連れてこられ、いわば強制労働をさせられているのだろう。その目的はなんだろうか？この異世界はなんなんだろう、と思ったが、誰にいきなり声をかけていいものかもわからないし、さっきみたいに難詰される可能性もある。確かに人間は地球の支配者のごとくやりたい放題しているのは事実だ。しかし、祐輔が直接しているとは思わないし、その自覚も薄い。なんて考えているとまたぞろみんながぞろぞろと一箇所に向かっている。どうも食堂に向かっているようだ。ふと、嫌な予感がした。もし晩ご飯に秋刀魚だの鶏肉だのサラダだのがあったら・・・・・・。さっきのトマト辺りがますます膨れて何か言ってくるかもしれない。が、予想は外れた。食堂では、種族ごとにかなりグループ分けされているようだ。まず、植物一般が斜め奥で、天井のライトの光を浴びながらジュースか何かを飲んでいる。日光浴で光合成をしているのか。ちょっとおかしくなった。次に、肉食と思われる恐竜だの哺乳類だのは、確かに何かの肉を食べてはいるが、色が青色であり、何の生物か判別不能になっている。なるほど、誰か知らないが配慮しているなー、などと感心してさらに観察する。タヌキだのリスだのは木の実らしきものを食べているが、形が真四角だ。これなら、あっちで光合成をしているクスノキやスギノキも感じ悪くならないのだろう。バッタだの、さっきのカブスなども黄色いビスケットみたいなのを齧っている。さらに、ミジンコやゾウリムシらは透明なそうめんみたいなのを旨いうまいと言って食べている。さて、人間の俺は何を食べればいいのだろうか。辺りを見渡すと、さっきの金髪外人がいた。丸くて色とりどりのお団子のようなものを爪楊枝でさして食べている。どこにあるんだろう。左手の

ほうに、カウンターがあって、そこでイチゴが相手を見ては食事を出しているようだ。列に並んで待つ。祐輔の番が来た。イチゴはチラッとみて

「人間ニンゲン、と」

と言いながらさっきの外人と同じメニューを渡してくれた。意外と重い、とトレイごと運びながら思う。乗っているコップの飲み物はなんだろうか？開いている席をかろうじて見つけ、喉が渇いているので、恐る恐るコップから口に運ぶ。一口飲んで、リポビタンDを飲みやすくした感じだ、と思った。肉体労働でお疲れでしょうってか。いよいよお団子に爪楊枝を指し、口に運ぶ。たい焼きのようだと思った。次は焼肉の味。団子なのにすごいな、と思って次を食べると、これはご飯の味。うーむ。一体どうやって作っているのだろう。今日見た作業場の感想では、文明レベルは現代日本よりも少々遅れている感じ、と言うのが、あくまで祐輔の感想に過ぎないのだが、この異世界の文明レベルはどの辺りだろう。エレベーターはあったな。なんて思案していると食事は終わった。昼ご飯抜きの晩ご飯だった上、たいした量でもなかったのに満腹感がある。何か特殊な食べ物なのだろうか、と思った。

さて、食事が終わると特にする事もない。自分のベッドを苦労して探すと、下のベッドにもう誰かが入っている。「カババ用」とあるからカバなんだろう。金髪外人に話しかけてみようか。しかし、どうも気が進まない。それより食べたからか、眠たくなってきた。腕時計を見ると、八時過ぎだ。いつもならテレビにかじりついているか、インターネットをしている時間なのだが、当然この世界にはそんな物はないだろう。携帯電話を取り出す。電波は入っていない。ワンセグももちろん駄目だ。駄目もとのインターネットももちろん無駄。せめて、リュックに入れていた文庫本一冊だけが暇つぶしの相手か。周りを見ると、それぞれ結構仲はいいらしく、おしゃべりしたり何かしているようだが、輪に入る事もできない。まず、誰か

一人話し相手を作らねば。そいつからここの情報を聞き出そう。そんな事を考えていると、いつしかうとうととし、祐輔は久々に深い眠りに落ちていくのであった。

第三章　死か労働か

翌日、朝は六時半に起きた。周りが起き出すのにつられたらしい。たっぷり寝たので何とか起き出せそうだ。腰と両腕が見事に筋肉痛で、体を起こすために支えることも苦痛な有様だ。こんな有様で今日なんとかなるのだろうか、などと不安を覚えていると、またみんなは食堂へ向かっている。祐輔も列に並び、歯ブラシは洗面所かどこかにあるだろうか、と思う。またイチゴが配っている。調理係なのだろう。カロリーメイトのようなクッキーの載ったお皿とコップを渡された。食べてみると、寿司の味である。朝から寿司・・・・・・と思ってコップの中身を飲むと、コーヒー味である。胃がびっくりしているのを感じながら食事を終え、トイレの場所をトナカイに聞くと、廊下に出て左だと言う。洗面所にも歯ブラシや歯磨き、それにコップも新品が用意されているのを見て、久しぶりに用を足した。その後、歯を磨きながら、ふと、メーカーはどこだろう、と見ると、

クラニカと言う日本のメーカーである。昨日は見損ねたが、風呂場のシャンプーも今日は見てやろう、ついでに今日の作業中も確認できるメーカーは見てやろう、と思った。洗顔、歯磨きを終え、する事もないのでベッドの上で横になってぼうっとしていると、七時半になったら突如、ラジオ体操の音楽が流れた。見ると、みんなちゃんとやっている。祐輔も飛び降りて体操する事にしたが、どうも何か違う。祐輔が小学生の頃にやっていた物とは何か微妙に違うので、前のニシキヘビのやるのを真似する事にした。

腕を大きく開き、天に向かって突き上げ、そのまま下に降ろしましょう～。はい上手。

何が違うかわかった。いちいちほめ言葉が入るのだ。必要か？

足を開き、足首に向かって手を伸ばしましょう～。よく出来ていま～す。

見えるのかよ、とか内心突っ込みを入れているうちに終わった。すると、みんなそのままぞろぞろと動き出す。作業場に行くのだろう、祐輔もともかく気合を入れて向かう事にした。肉体労働など、もう十年以上前の学生バイトの時しかしたことが無い。それも、一日限りの物ばかりだった。なだらかにカーブする廊下を行くと昨日の作業場への扉につく。カウンターを見たら昨日のタツノがいる。会釈すると向こうも返してくる。まさか彼は二十四時間体制で新人？の受付をしているのだろうか？作業場に入ると、みな広場になっている場所に集まっている。中には作業の仕込みなどをしている人もいる。改めてみると、大きく六ラインほどがあって、さらに細かく加工や検品する場所があるらしい。右手奥は溶接炉のようになっていて、昨日も何人かが、防護面のような物を被って、いわゆる溶接のような事をしていた。部品を作っているのはわかるのだが、何の部品かは昨日では全く分からなかった。プラントかなにかの部品だろうか。時計を見ると八時前だ。と、雑談が止み静かになった。

奥の扉が開いて、三人入ってきた。あそこは事務所のようになっているのか。一人はライオン、一人はトウモロコシ、そして一人は昨日の女性だ。今日はグレーのスーツだ。

「おはようございます」

みんなも挨拶を返す。人数がいるので、相当大きな声になる。

「今日も、ガルクーダに使われる部品を中心に作っていただきます。

年内はかかりきりになるでしょう」
と言って、言葉を切る。
「少しペースを上げないといけませんが、がんばってください。以上です」
とだけ言って話は終わった。後の二人は何も話さない。みんな、めいめいの作業場に向かう。祐輔がカブスを見つける前に、向こうが先にこっちを見つけた。
「さぁ、今日もがんばろう」
とだけ言って歩いていく。ともかく、働くしかない。働かずんば死の可能性がある。

と、思っていたら、予想は真実であった。今日も台車を押して完成した部品を運んでいると、中央辺りで何か騒ぎになっている。バラの花だろう、床に突っ伏してしまっているのが見えた。すごい勢いであの用心棒役らしき三人とタツノがやってきた。ゾウがまたパワフルノーズブリーカーでバラを持ち上げた。そして、思い切り膝に打ちつけた。ぎゃあぁーっと作業場にバラの悲鳴が響く。また打ち付ける。わざとか、見せしめるために公開処刑をしてるんだ、と祐輔は思った。その後、Ｔ－ＲＥＸが容赦なく体を拳で貫いた。バラの体から緑の血しぶきが出た。完全に死んだだろう。バラの遺体を持って四人は出て行った。周りは何事も無かったように作業を続けている。祐輔は心底恐ろしくなった。もし自分の体力が尽きたら。どこかもわからない異世界で惨めに殺されてしまう。そんなのはごめんだ！何が何でも生きてやる。バラの死を見て以来、祐輔には不思議なスイッチが入ったらしい。その日一日も、しんどくはあったが、普通に働きぬいた。その次の日も、あくる日も無我夢中で台車を押し、鉄の棒や部品を運び続けた。いつしかカブスが完全に交代で押してくれるようになった。一日一人は倒れ、そのたびに殺された。祐輔はだんだん感覚が麻痺していくのがわかった。ここは命の尊厳だの人権だのは一切省みられない、そういう場所なんだ、と。

日付け、と言うのがこの世界にもあることを知った。それは、ある日の仕事終わりに
「やっと一週間終わった」
と言う声を聞いたからだ。さらに耳を澄ますと、どこどこへ行こう、などと言っている。外出出来るのか！？と思い、思い切ってそのナメクジに事情を尋ねた。
「ああ、日曜はロッタラダム市街の中ならどこでも行けるよ」
とのこと。そう言えばここの地名なんかも全く知らない。さて、どうしたものか。外へは言ってみたい気もするが、金もろくに持たずに出ても・・・・・。ちょうどタツノがカウンターにいる。聞いてみよう。
「ああ、休みの日には幾らでも外出出来ますよ」
と当たり前のように言う。
「でも、あのう、僕お金を持っていないのです」
「そりゃそうだ、まだ給料貰ってないでしょ。末締めの月頭の払いだもんね」
「あのう、カレンダーってあるのですか。」
「あるよ。大部屋にないかな？そうだ、じゃあこれをあげよう」
と足元から小さなカレンダーを出して渡してくれた。
「今日は２３日」
らしい。もちろん現実の日本とは全然違った。お礼をいい、ついでに思い切ってずっと疑問だった事を尋ねる事にする。
「あの、何故みんなと会話が通じるんでしょう。日本語と言うか」
するとタツノはキョホホホッと口を開けて笑い
「ここにはある魔法がかけてあって、それぞれの分かる言語で理解しあえるようになるのさ。日本語が何か知らないが、私はずっとタツノオトシゴ語で話しているよ、君ともね。キョホホ」
なるほど、魔法か。タツノにお礼を言って大部屋に戻り、唯一の自分のスペースのベッドにどっかり転がる。カレンダーを見ると、十

月になっている。パラパラ捲ってわかったのは、ここには十月までしかないと言う事だった。何かしら微妙に違うのな、と思う。末締めの翌月頭払いなら、さ来週ぐらいにはもらえる計算になるが、一体どんな単位で幾らもらえるのだろうか。来て間もないし、期待は無用か。それよりも、初日にスズメバチに抱えられて、ちょっとしか見なかったが、塔の周りを囲っていた、ロッタラダム市街とやらはどんな場所だろうか。一瞬、脱走と言う考えが浮かんだが、すぐに諦めた。その後どこへ行けと。それにそこらをヨタヨタ歩いていてもまた親衛隊みたいなハチ共にでも見つかって捕まってパワフルノーズブリーカーがオチだ。まぁ、まず市街地を見ることだ。人見知りのする祐輔にはまだ親しい相手は見つからない。まぁそのうち、と祐輔は読み飽きた文庫本をまた読み出した。

翌日は七時に起きた。きわめて規則正しい生活だ。どうも今日はラジオ体操もなさそうなので、ゆっくり食事を取り、八時頃になったので、タツノのカウンターのところに行ってみたが、誰もいない。仕方ないので、部屋に戻り、カブスを探し、どうすれば外出出来るのかを聞いてみた。

「ふんふん、一階に行けば受付がいるから、働いている階と、名前さえ言えばすぐに出してくれるぞ」

とのことだが、一階への行き方がわからない。

「そうか、知らないんだな」

と言うと、ついて来いと言い、歩き出す。ここの住人は愛想こそ無いが、質問すればそれなりの応対をしてくれるのだな、と改めて思った。カウンターの横に扉があって、そこを開けたらすぐ二基のエレベーターがあった。

「これが従業員の移動用。でも普段は使わない。使うとタツノが怒り出すよ。休日は別な」

と言って去っていった。使うとゾウ辺りが飛んできそうだな、と

思った。このまま行くか迷ったが、別に持ち物も不要だ、と思ってそのまま降りることにした。何人かも一緒に降りるようだ。かなり長い間乗った。この塔、一体何階建てなのだ？と思って回数を見ると五十四階になっている。かなりの高層ぶりだ。他の階に行くのはまずいのだろうか？ちなみに乗ったのは何階だったか見忘れた。これじゃ帰りに帰れない、まずい、と思って、僕らは何階で働いてましたか、と聞くとダンゴ虫が

「二十七階だ」

と教えてくれた。ちょうど真ん中かぁ、と思った。何箇所かで止まる。乗ってくるのは同じような、と言うか、相変わらず魑魅魍魎と言うか、あらゆる生物の擬人化バージョンであった。ズゥンと音を立てて、一階に着いた。扉が開いたので出ると、その風景には息を呑んだ。床は豪奢な

大理石が敷き詰められており、絨毯は赤毛で、恐るべき広さのホールに、名画のような物が、見た限り西洋東洋を問わず飾られており、柱も輝いており、シャンデリアは輝き、超一流ホテルを想わせる。辺りには、部分部分に様々な彫刻が台座の上においてあり、そのどれもが魔獣や天使らしき風貌だが、祐輔はそれらが何一つとして何かが分からない。そして、もっと凄いのは、天井は宇宙のようになっており、星々が煌いている。しかも部屋の中は一切の暗さを感じさせず、むしろ眩しいぐらいである。一体なんなんだこれは、と息を呑んでいたが、他の人々は見慣れているらしくさっさと向こうへ歩いていく。遅れてついていくと、まさにホテルの受付のような場所がある。違うのは、受付が孔雀とカナブンなところであろう。やはり色彩を考慮しての人選なのだろうか。

「外出したいのですが」

と言うと、ここに名前と階と作業場を、とカブスの説明どおりの事を書かされて終わり。こんなに簡単でいいのだろうか、と思ってしまうが、どうせ帰ってこないと見つけ出されてあの世行きだ。大きなガラス張りの自動ドアを抜けて、久々の外界へ繰り出す。目の

前に広がる街並みは祐輔の想像を遥かに超えたカオスだった。世界中の特徴ある街をあっちこっちから引っ張ってきて適当に配置したというか。ゴシック風の洋館の横にアフリカ民族風の納屋があり、その横は中華街で、その更に横にはＮＹ風の最新鋭のビルが建つ。延々とそのような街並みが続く。誘われるまま祐輔はその中へと歩き出した。

そうだ、ともかくものの値段を知ろう。幸い、日本茶屋らしき店がある。店頭の長いすの上に、お勧め品のようなお菓子がおいてある。値段を見たら、「四百ゼニー」とある。ゼニーですか、とつぶやきながら、横のインド料理屋の値段表を見てみる。唐辛子ロストア風カレー　六百ゼニーとある。どうも貨幣価値はほぼそのままで、円がゼニーになっているぐらいらしい。ところで、俺以外は金を持っているのだろうが、あの大部屋の連中はほとんど自分の持ち物を持っていなかったように記憶するが、ものは持ち込めないのだろうか？が、やがて更に歩いてみてわかった。そもも、ものを売っている店が無い。あるのはせいぜい食べ物屋ぐらいなのだ。とにかくやたらめったら街を歩く。見かけるのは擬人化住人ばかりで、それ以外の存在はやはり無い。さっきの日本茶屋も番頭はナナフシだったし、インド料理屋はプレシオドス系の首ながだった。ちなみに、あの系統の連中は正面のマネキン顔以外の本来の場所の顔もあったりするが、機能はしていないようで、ただの飾りになっている。横に近代高層ビルがある。テナントを見てやれ、と見てみると、ほとんど名前は無い。こういうビルに入ってそうな証券会社だとか商事会社の類は０。出て、眺めた空はあの日と同じ曇天だ。この高層ビルのガラスもその色を移しこみ、薄暗いグレーになっている。なんだか、この世界にはそもそも晴天自体がなさそうな気がしてくる。希望なき世界、か。

この希望なき世界の塔の周り自体はどうなっているのか知りたく

なった。一番いいのは塔の最上階から周りを見渡すことだろうが、上れるかわからないし、まだ戻る気もしない。そこで、もう一度さっきの高層ビルに入り込み、最上階を目指すことにする。二十階あるようなので、そこから見たら、それなりに展望が開けるはずだ。エレベーターを探し、乗り込む。最上階は幸い外に出れる作りになっていた。周りをフェンスで囲ってあるだけで、何も無かった。まず片方によって遠くを眺めると、鬱蒼とした森林が目に入る。あそこが最初に見た森だろうか？その向こうに勾配と荒れた禿山が見えるので、おそらくそうなのだろう。続いて、反対側に向かった。と、人がいる。てっきり無人だと思っていたのに。しかもそれはあの作業場のスーツの女性ではないか。こちらに気づいているのかいないのか、一心にスケッチらしき事をしている。声をかけるべきか迷ったが、どうも職場の上司に当たりそうなので、無視はまずいだろう。こんにちは、ぐらい声をかけようと思った時、向こうが顔を上げて目線を合わせてきた。祐輔は初めてまじかで彼女の顔を見た気がした。初日に驚いたほどの美貌は今日変わっていないが、服装だけが違い、結構ラフな格好をしている。ジーパンをはき、ネルシャツに袖の無いダウンジャケットを着込んでいる。随分印象が変わる物だ、と思っていたら、無言で相手をじろじろと見つめる事になってしまった。さぞ不審であったろうが、彼女は何も言わずじっとこっちを見ていた。我に返り、

「あ、あ、あの、ここんにちは」

と声を絞り出す。蚊の鳴くような声とはこのことに違いない。

「こんにちは」

と彼女は返してきた。心なしか微笑んでいる。さぁ踵を返して去るんだ、と心は命令している。何を話していいかわからない。

「少しは慣れた？ユウさん」

と、聞かれた気がした。気のせいではなく、本当に聞かれたのだ、と理解したので、

間を空けて、しかもなぜか

「ばっちり慣れました」
などと返事を返す俺。ちょ、何を言ってるんだ俺は、と思った。
「バッチリ慣れたんだ、ふーん。早いね」
と彼女は朗らかな笑みを浮かべた。
「すぐに殺されると思ってたよ」
と、持っていたペンをクルクル回す。祐輔自身もそう思わなくもないが、そう簡単に死にたくは無い。
「必死なんです。まだ死にたくない。こんな異世界で死んだら何か凄く情けないような気がするんです。俺の人生なんだったんだ、て」
言葉がすらすら出た。心の底から思っていることだからだろう。
彼女は、二度うなずいた。
「意思よ」
確認するようにこちらの目を覗き込む。
「意思があれば脱出できる。あなたも、私も」
と言うと、彼女は書いていた絵に目を落した。
「あ、あなたの名前はなんて言うのですか？」
祐輔はこんな質問をした。大胆になっている。現実なら絶対言えないのに。
「私はアヤ。向こうでは及川綾」
向こう、と表現した。この人は、全てを知っているに違いない。
「アヤさん」
祐輔は腹をくくった。
「教えてください。僕らは何故ここに来てしまったのか。そして、どうすれば脱出出来るのか」
アヤは複雑な表情をした。
「正確にはわからないわ。ただ、脱出できる人は確かに存在する」
「いるんですね」
「うん、いっぱいいる」
とだけ言って、アヤはフェンスの向こうに視線を投げた。祐輔も見たが、こちらの地平線は彼方までひたすら荒野と山脈しか見えな

い。何も無い、と言っていい。アヤも本当に知らないんだ、と理解できた。
「でね」
とアヤはこっちを見た。
「私は絵を描きたいんだけど、あなたは何をしにここにきたの？」
と言い出した。
「あっ、そのう、、周りの風景を見たかったんです」
「もう見たでしょ？」
「はい、見ました。」
「なら邪魔しないでくれる？」
ここを去れ、と言う事か。そうだよな。俺みたいなメガネデブなんかと話すことはないよな。
「すみませんでした、では失礼します」
祐輔は一抹の寂しさを覚えながら去った。
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」
アヤが呼び止めるので振り向くと、
「わ、私は頼まれてこれを書いてるんだから、しかも締め切りは今日なのよ、じゃ、邪魔とかじゃないから勘違いしないのよ！」
とだけ言うと、ツンとあっちを向いた。何がなんだかわからない。ともかく、祐輔はこの場を去った。

その後も、塔をぐるっと囲う街を結局一周してみた。新奇さだけでお腹一杯になった気がした。アヤの言葉を繰り返してみた。脱出は可能、脱出できた人もいる、でも、その方法はわからない、か。部屋の同僚らは知っているのだろうか。カブス辺りに聞いてみるか、と思いつつ塔へ戻った。何が何でもこの「希望なき世界」から脱出せねばならない。

疲れたので、二十七階のあの部屋に戻ると、あんまり人がいない。みな俺の知らないどこかで遊んだり飲んだりしてるんだろうか。カ

ブスも見かけない。と、金髪外人がいる。何かノートに書いている。ノートは売っているのか？なら日記でも書けば暇つぶしになるかもしれない。思いつつ、思い切って、聞きたいことがあるのですが、と話しかけた。すると、彼はノートに何か書いて見せてきた。英語、かもと思ったが、そこは魔法とやらの力だろう、日本語で書いてある。

「俺は話せない。喉が悪い」

と書いてあった。なるほど、と思い、筆談でもいいのでぜひ教えて欲しい事があるのです、と言うと、どうぞ、と書かれる。そこで、いきなりですが、この世界からの脱出方法を知っていますか、と聞くと、知らないと言う。はい会話終わった、と思ったが、何か申し訳ないような気がして、自己紹介と、国籍を言った。彼も返してきた。俺はアメリカ人でロージャと言う。戦争に行って至近距離で硝煙の多い炸裂弾が爆発し、煙を大量に吸ったせいで喉をやられた、と言う。まだ若そうだから、アフガンかイラク戦争か、と思った。いつごろからここにいるのですか、と聞くと、三ヶ月前、図書館で本を読んでいたら、眩暈がして、気がつけばここに運ばれていた、とのことだ。祐輔は、僕は占い師の玉を覗き込んだら、森のほうで倒れていて、スズメバチにここに運んでこられたんです、と話した。彼は書く。

「色んな生物と話してみたが、一つの共通項があるように思う。それは、悩んでいる。」

悩みだと・・。タンポポやナマコやアリンコにも悩みが？祐輔は、それぞれに悩みが？と聞き返してみた。ロージャは頷く。

「種族間の調和や、敵対する生物との駆け引き、子孫の残し方、目標を見失う、色々あるようだ。俺で言うと、戦争に行った事の意味だ。こうして声を失い、国民には不義の戦争と罵られるモノに何故参加したのかと。」

それは、イラク戦争のことか、と聞くとイエスと書く。確かに、あの戦争は賛否両論あるだろう。だが、どちらにせよ喉を潰すとい

う代償はたまらないに違いない。祐輔は彼に深く同情した。その後も、色んなことを淡々と二人は話し続けた。二人は、年も近いこともあって、互いを理解しあうことが出来た。そうして、この休日は終わったのだった。

アヤは部屋に戻り、ベッドに腰掛けて一息ついた。サボテンに渡す風景画は一応書けた。クルクルと巻いて輪ゴムでくくる。狭い三畳の部屋だが、一応個室なだけマシだ。絵を描くのはアヤの唯一の趣味だ。でも、所詮下手の横好きでしかないが。ほとんど独居房状態の部屋が、この３５階のほぼ全てを占めている。ここへ連れて来られてもう半年近い。最初はひたすら化粧水の瓶にシールを貼る仕事を延々やらされた。来る日も来る日もだ。嫌になってヒステリーを起こしたキンギョがその場で首を折られて殺されたのを見てから変わった。アヤもヒスを起こす手前だったのだが。今十九歳。高校を卒業した後、何もする気もなく、なりたい物も無く、服屋でバイトを始めた。一日中立ちっぱなしで足がむくんだ。店長は意地悪なババアだったし、自然と長続きしなかった。しばらくして辞めて、ガールズバーで働いた。単に時給が良かっただけで選んだ。常連がついた。みなアヤを口説くのが目的だったらしく、誘いを断ると来なくなった。彼氏は一応いた。踊るほうのクラブのバーテンだった。一緒にいたら楽しかったが、中身も夢も何も持たない男だった。半年会わないうちに声すら忘れた。アヤはいつしか向こう側に帰る必要も感じなくなりつつあった。冷たい両親、冷めた社会、見失う希望。なら、別にここでもいい。ここではアヤは出世して、管理職的な立場になれた。二十七階の鉄鉱部品作業場の発注管理補助と人割りの管理補助をしている。幸いと言うかＰＣは最低限触れた。服屋のバイトにも使っていたからだ。髪の毛をかきあげてまんじりとする。久々に人間が来てたな。彼も、おそらく私のように希望を失い生きる気力を損ねていた人なのだろう。ここは、そう言う「弱さ」に付け込んで誘い込むみたいだ。窓の外は漆黒の闇だ。この世界に

は星も月も無い。あるのは昼間の薄汚れた太陽だけ。ただ、働いて寝るだけの世界。でも、それ以上の何かを求めるのはひょっとして人間だけじゃないかしら？アヤは枕に顔を埋めた。アヤ自身、気づいていないが、彼女自身も「意思」を見出しきれずにいる。

第四章　敗北

祐輔は来る日も来る日も完成部品を運ぶ作業に従事した。金髪のロージャとはだんだんと仲良くなってきた。ロージャはとても細い。見ていて少々不安なほどだ。そう思っていたら、祐輔にも変化が起きてきた。まず鏡に映る顔の面積が目に見えて減ってきた。それと、ズボンのベルトが明らかに余ってきた。ベルトを鋏で切って短くせねばならないほどだ。ここには体重計はないようだが、どう考えても痩せてきている。それから、体力がついてきたようで、段々疲れなくなってきた。それと、腕などに筋肉が少しずつついてきた。いい事ずくめだな、と祐輔はある晩思った。テレビもＰＣも無いし、余計な不愉快や感情の起伏も無い。ロージャに「チェス」を教えてもらい、紙で作った駒を動かして遊ぶようになった。ロージャの所属した陸軍ではこれとトランプが流行していたらしい。トランプもノートを切って作って遊んだ。カブスと、もう一人のロージャの相棒の猫じゃらしのネジャーラと４人でブラックジャックやポーカーなどをするようになった。何しろ１８時頃に仕事が終われば次の日まで何もする事がない。

ある時、ロージャに、どこでノートを手に入れてるんだ、と聞くと、自分は特別だと言う。ロージャは喉が潰れていて声が出ないので筆談用にノートとペンが支給されるらしい。どこかで売っていないか、と聞くとＮＯらしい。そこで、ロージャに頼み込んで多めにノートを貰って分けてくれないか、と頼むと、やってみると言って

くれた。祐輔は、日記を書きたいと思っていた。

ある日、鉄棒を台車で押していると、アヤがやってきた。今日はブラックのスーツを着ている。管理職だと聞いているから差をつけるためにスーツを着せているのだ、と誰かに聞いた。

「ユウさん、ちょっとお話があるの。明日から持ち場が変わって、鉄輪の打ち付けをやってもらう事になったわ」

「そうですか、わかりました」

と返事した。持ち場変更か、、打ち付けはしんどそうだな・・・・・・と思っていると

「大丈夫よ。ユウさん最近筋肉ついてきたから」

とアヤは言う。えっ、と思った。そんな事を他人に言われた事は生まれてこの方一回も無い。また太ったんじゃねぇの？とかつての会社の同僚に言われた事はいくらでもあるが。

「そ、そうですかね」

と祐輔は思わず照れてニヤニヤしてしまった。我ながら不気味である。アヤは、一瞬変な顔をした後、

「と、とにかく明日から異動だから。シェッパーさんのところに行くのよ、じゃあね」

と言ってハイヒールを鳴らして去っていった。ああ、あのシェパードのところか。まぁどこでも変わりないや。単純作業は根性だ。これさえあればこなせる。祐輔には、そう言う事がなんとなく分かってきていた。

翌日から、祐輔はシェッパーのところで、背丈の半分ぐらいの鉄棒を立てて、そこに歯止めのわっかをはめ込む作業に就く事になった。手袋をはめ、大きなカナヅチでガンガンとやる。五月蝿くて耳に響く。耳栓が欲しいところだ。シェッパーのほかに十五人程度がそれぞれひたすら鉄輪を打っているが、慣れているらしくみな軽々やっている。単にモノを台車で運ぶよりはある意味では楽だが、腕

力がモノを言う作業になった。一回支えている左手を叩いて痛くて転げまわったら、すぐシェッパーが来て、冷却スプレーをかけてくれた上で、水で冷やして来い、一時間休憩していい、と言われた。横のウミガメも大丈夫か、動かすな、などと心配してくれた。そこで、言われたとおりにしようとしたら、アヤが来た。やべっ、何か注意されるかな、手じゃなくて鉄輪を打つのよ、ぐらいこの子は言いかねない、なんて思っていたら、

「大丈夫なの？どこを怪我したの？」

と心配そうに顔を覗き込んでくる。実は情に厚い子なのか、と祐輔は意外な気がした。この子、ひょっとしたら、いわゆる「ツンデレ」かもな、などと思った。

やがて、翌月になった。一日、作業が終わりかけになると、心なしかみなが浮き浮きとしているように感じる。そう言えば幾らぐらいもらえるのか誰にも聞かずじまいのままだった。衣食住が保障されていて、特段遊び場もないとなると人間は金のことは忘れてしまうものらしい。少なくとも祐輔は綺麗さっぱり失念していた。ロージャのところへ行き、

「給料ってどうやったらもらえるの？」

と聞くと、タツノのカウンターへ行けばもらえる、と答えてくれた。そして、今日うまい事行って大目にノートを貰ってやる、とも言ってくれるので深く感謝した。

「今日の作業オワリー、オツカレサーン」

と二十七階の作業場長であるライーオが言う。ライーオは朴訥としてほとんど話さない人柄だが、温かい人物であるのは伝わってくる。みなぞろぞろとタツノのカウンターへ向かう。祐輔もひたすら並び、十分ぐらい経つと順番が来た。

「はい、ユウさん」

とタツノが封筒を渡してくる。小銭も入っているようだ。ロージャと並んで帰る途中、中を見ると札が四枚、一万ゼニーと書いてあ

る、後は小銭が何枚か入っている。確か茶菓子屋のお菓子が一個四百ゼニーぐらいだったからそのまま円＝ゼニーでいいな、と思った。ロージャの給料も聞いてみたかったが社会通念上良くないので止めた。ロージャは部屋に戻ると、こっそりと祐輔にノートを一冊とボールペンを渡してくれた。祐輔は、お礼に三百ゼニーを渡そうとしたが、ロージャは首を振って断り、食堂と風呂と指さした。どっちからにする、と言う事らしい。風呂を指差しながら、この貰ったお金で明日は街で何か食べてみようか、などと思っていた。

翌日、ロージャと二人でロッテラダム市街へと向かった。ロージャいわく、あるのはやはり飲食店だけらしい。一体どんな意味があってそう言う風に限定しているのか分からないが、食べる楽しみだけは与えていると言う事か。後は恋愛は自由らしい。そう言えば、前からチラホラカップルは見かけていたが、やはり同種族ばかりだ。とか考えていると、前からジャッカルとハゲタカが来る。三人ずつで、こちらに向かってくる。なんだろうと思っていると、リーダーらしきジャッカルが

「おい人間ども、ちょっとこっち来いよ」

とすごんでくる。ここに来て、初日こそサメやらに頭を小突かれたりしたものの、それ以外に危険を感じる事は無かった。祐輔は少し震えてきた。ケンカには全く自信が無い。一方のロージャは軍人あがりだ。怯むでもなく着いて行くので、祐輔もしょうがなく一緒に行く。本当は逃げ出したい。足がすくむのが分かる。横にハゲタカ二匹がぴったりついてくる。路地裏に連れ込まれ、囲まれる。

「今日はお財布が重たいよな？ちょっと貸してくれよ、今度の給料日に返すからさ」

と言いながらジャッカルは物凄い目つきで睨んで顔を寄せてきた。祐輔は怖くて目を逸らした。すると、ロージャが何も言わず、と言うかこんな時に筆談をする気にならないらしい、いきなり横から手を伸ばし、ジャッカルの首根っこを掴んで壁に押し付けた。同時に、

ハゲタカの一人がロージャに頭突きを食らわした。怯む事無くロージャは体勢を立て直し、右ストレートをハゲタカに食らわす。祐輔が確認できたのはそこまでだった。もう一人のジャッカルにいきなり腹に蹴りを入れられた。息が出来なくなってよろめくと、膝蹴りが鼻に来た。鼻血が噴出すのがわかった。更に頭に物凄い衝撃が来た。自分が地面に倒れ、ハゲタカにまたがられたのがわかったので、何とか立ち上がろうとするとまた鼻に何度も衝撃が来た。

「や、やめてくれ」

と祐輔は必死に逃げようとしたが、頭に衝撃を受けて意識を失った。

ふと、目を開けた。ここはどこだろう。病院のようだ。横を見ると、ロージャもベッドに眠っている。頭に包帯を巻いている。大丈夫か、と思った瞬間、何が起こったのか思い出した。ジャッカルらに絡まれて・・・・・・。口の中が一杯切れているのがかる。何発も殴られたのを思い出して、悔しいのと情けないので体が熱くなった。頭には包帯、頬にはガーゼを巻いているようだ。何故こんな目に遭わなきゃいけないんだ。ふと、一筋の涙がこぼれた。すると、ドアにノックの音が聞こえた。慌てて目をこすった。ゆっくりとドアが開き、ヤギとドーベルマンとゾウとタツノらが入ってた。ヤギは入ってくるなり

「あっ、あっちのニンゲンは意識が戻ってる」

と言うなりこちらに来て、

「気分はどうだい。酷い目にあったね」

と言いながら額に手を当てる。

医者なのか、ヤギなのに?と祐輔は思った。

「熱も無い。こちらのニンゲンは最低限の事情聴取は出来ます」

とドーベルマンに言う。ならこの人は警察か?

ヤギはロージャの脈を測ったりし始めた。ドーベルマンが

「私はドベロ。塔内警察隊傷害処理班です。よろしく」

と言いながら握手してきた。そうか、これだけ人がいれば警察はやはり必要だよな。
「今回の事件は、現行犯でジャッカル三人とハゲタカ三人の恐喝と言う事で間違いないとわかっている」
と言葉を続ける。あの後来てくれたのか？などと想像していると、
「よって、彼ら六人を死刑にした。」
はやっ！さすが働けなくなっただけであっさり処刑する国だけある。
「この国で最も許されない事は秩序と調和を乱す事だ」
ドベロは続ける。
「他者と共存共栄出来ない一切の存在は排除する。覚えておいて欲しい」
祐輔は頷く。
「ところで、こちらのロージャだが」
とドベロは言う。
「彼は正当防衛とは言え暴力を振るい、ハゲタカたちも傷を負っていた。これも許されない。彼には懲罰房に入ってもらう」
そ、そんな、と祐輔は思った。彼はいわば祐輔を守るためにも戦ってくれたのに。祐輔は納得いかない。
「それはどれぐらいで出てこれるのですか」
「三日だ」
三日ぐらいなら、とも思ったが、どうにも腑に落ちない。
「なら無抵抗でやられるままになっておかないといけなかったのですか」
唇が切れて血が出てきたらしいが今は気にならない。
「そうだ。この国の警察は優秀だ。すぐにやってくる。暴力はいけない。暴力が法で許されているのは警察だけだ。」
と言うと、ドベロは優しく祐輔の肩を叩いた。
「今は感情も高ぶっているだろう。今日はもうここまでにしよう。お大事に」

と言うと、タツノに代わった。タツノは、怪我が治るまで仕事はお休み、ロージャも怪我が治り次第懲罰房行きになるが、なに、単に一人の部屋で頭を冷やすだけさ、心配は要らない、キョホッホと笑った。
「ここは塔の中ですか？」
と祐輔は聞いた。
「そうだよ。１０階になる。必要な物があるなら看護士に言えば持って来させるよ。」
と言い、そうして４人は出て行った。ロージャはまだ気を失ったままだ。勇敢に抵抗した分、ダメージも大きいのだろう。自分の弱さは知っていたが、改めて不甲斐なさを感じて憂鬱になった。と、そこへまたノックの音がした。目をやると、ライーオとアヤが来た。
「ユウさん、大丈夫かね」
ライーオが果物籠片手に口を開いた。お見舞いに来てくれたのか。
「なんとか・・わざわざありがとうございます」
アヤを見ると、悲壮な顔をしている。ロージャと祐輔のミイラっぷりに衝撃を受けているのだろう。
「災難だった。ゆっくり養生して欲しい」
ライーオは腰掛けに腰を下ろしていう。心から同情してくれているのが伝わる。
「僕はいいのですが、ロージャは懲罰房に入れられるらしいんです」
「そうか、仕方ないな。ケンカ両成敗がここのルールでもあるんだ」
「ユウさんは入らないの？」
とアヤが眉を顰めて聞いてくる。
「僕は、反撃も出来ず一方的にのされてしまったので」
と言う時、祐輔は心底情けなかった。戦うべき時に戦えなかった。
「カッコワルイ。やられっぱなしだったの」
アヤは幻滅したように言う。ライーオが目線でたしなめる。
「男ならやられたらやり返せ！」
とアヤは本気で怒っているようだ。ライーオはムキになっている

アヤをなだめ、お見舞いの品を食べなさい、と言って二人で出て行った。祐輔は歯軋りして怒っていた。男なら、やられたら、やりかえせ、か。怒っているのは自分に対してである。次、俺の尊厳を傷つける奴は絶対に許さない。そいつとは、殺されてでも戦う。祐輔は決意していた。

第五章　尊厳と発見、そして脱出へ

祐輔は二日ほどで退院し、仕事を再開した。散髪屋の存在を知り、がっつり刈り上げてほとんど坊主頭に近い髪型にしてもらった。祐輔の何かが激しく変わった。まず、今まで祐輔におぼろげに残っていた憂鬱感、倦怠感がほとんど消えうせた。寝る前に必ず日記をつけ、今日の出来事、反省、目標ややりたい事などを記入するようになった。

朝は誰よりも早く職場に行き、下準備をし、掃除をし、黙々と鉄輪を打った。アヤと会う事があっても目も合わせない。アヤの存在を認識するたびに、無言で責められている気がした。恥ずかしくて情けないと言う気持ちが消えない。やがて、ロージャが懲罰房から出てきた。部屋にいた祐輔は走って出迎えに行った。ロージャは怪我も治り、元気一杯だった。祐輔は固く握手し、あの時はありがとう、そして役に立てなくてすまなかった、と謝った。ロージャは、筆談で、6対2で勝てるわけが無い、むしろ軍人の僕がひ弱すぎて情けない、申し訳なかった、と言ってくれた。カブスやネジャーラも寄ってきた。そしてまたみんなでトランプで遊んだ。

時はとどまる事無く流れる、それだけはいかなる世界の全ての存在に平等なのだが、こと祐輔にとってはこの異世界に来てからの数ヶ月は、途方も無く価値のあるものとなった。祐輔は、厳しい肉体

労働をこなし、肉体の健康を手に入れた。体重は減り、筋肉質になった。余計な事を考える事も一切なくなり、鬱病などは当の昔に治っていた。余計な事を考えないで人と接しているうちに、ロージャをはじめとした新たな友達も出来た。中でも、祐輔は、自分が本当に変わった、と思えるようになったのは、後輩、後からこの世界にやってきた者に対し、親切に振舞えるようになったことだ。昔の祐輔は、ＩＴの会社にいたときも、新入社員でも中途の人でも派遣でもなんでも、一切気にしない立場だった。そんな労力は時間の無駄、研修のやる事だろ、教えた分給料が増えるなら教えるわい、と言う考えの持ち主だった。だが、ここに来て変わった。

最初にここに来た時の不安感や寂しさを今も覚えているので、見かけない顔には進んで食事の場所や給与の仕組み、建物の配置などを教えてあげるようになった。常に感謝された。祐輔は人生で始めて人に感謝される喜びを知ったのだ。ある日も、新しく入ってきたタヌキに作業場のどこに何があるぞ、と教えてきたら、ふと目線に気づいた。それはアヤの目線だった。逸らせずにいると、アヤはＧＪと言う感じで親指を突き立ててきた。照れくさくてうつむいたが、素直に嬉しかった。祐輔は、確実にアヤに恋焦がれていた。さすが所詮は擬人化されていても違う生物らしく、アヤほどの美貌の持ち主でもここでは全く恋愛対象にならないらしく、一人もアヤを好きだと言う人を聞かない。

ロージャは向こうの世界に恋人を残して来ていて、携帯の画像を見せてもらったが、やはり金髪青い目の美人であった。ロージャに相談してみようかと一瞬思ったが、それでどうなるわけでもあるまい。日曜日にデートだって誘ってはいけないと言う決まりも何もないのだが、誘う勇気など一ミリも持っていない。最近は寝るときにアヤの顔を思い浮かべていたりする。この甘酸っぱさもここに来なければ感じられなかっただろうな、と思うと、最近はむしろここに

放り込まれてよかったのかな、とすら思うようになってきていた。片思いなんざいつ以来だ？などと思って眠りについた。

そんなある日、おかしな事に気づいた。カブスがいないのである。作業が終わった後、大部屋でカブスのベッドのところに行くと、カバーが無くなり、空っぽ状態である。もしや！？と思い、上段に位置しているカーネーションに聞いてみると、

「ああ、抜けたんだろうねぇ」

と言う。理由は知っているか、と聞くと

「それがわかればおいらも抜けれるさぁねぇ」

との事。ロージャのところに向かい、報告した。ロージャも驚いたと同時に、いつも遊んでいた友の脱出を喜んだが、さて、何がどうなったから彼は抜けられたんだろう、と二人して頭を悩ませる事になった。何か最近変化はあったか？と思い起こしてみると、一つある。最近は、現実世界に戻ったら妻を幸せにしたい、そのためにここ以上にがんばるぞ、と何度も決意を口にしていた。どうも、ここに来る以前のカブスは駄目な夫だったらしく、威張りちらし、妻に蜜のある場所を報告させては、自分が独り占めしているような駄目夫だったらしい。その事で妻に不快な想いをさせたし、いきなり行方不明になって心配もさせているだろう、とため息をついていた。・・・・・と言う事は？ロージャが言う。以前の自分を越えようと願ったら、脱出出来るのか？祐輔はアヤの言葉を思い出していた。意思があれば達成できる、だが、あと少し、あと少し何かが足りない。二人はノートに箇条書きにしてまとめ、うんうん唸って考えるのであった。

アヤは、最近いつも不思議な感情と戦っている。それは、気づけば視線があの人を探している、と言う事へのなんとはなしの不愉快感と、自然にそれを行っている自分を肯定出来ない理由がわからない、と言う苛立ちだ。あの人、目に見えてたくましくなった。数ヶ

月前チンピラにぼこられた時はなんという根性なし、と見下す感情が芽生えたのに、それ以降、顔つきが変わって、仕事はガンガン出来るようになっているし、新人にはとても優しいし、頼もしくなった。でも、心のどこかで、ここに来るような奴なんだからどっかに問題を抱えているに違いない、とも思っている。アヤはもちろん自分もそうだと知っている。生きる意味を見失い、夜の世界で半端な水商売で小金を稼いでいただけの、生きる価値も無い一人の女。アヤ本人だってここでは一生懸命働いている。そういう自分は認める。でも、なんだかそれだけでは足りない気がしている。ただ一生懸命働くだけでは駄目なの・・？あと少し、何かが足りないから私はここから脱出できない。もうすぐ一年ぐらいになるのに。アヤは少しイライラしたが、やがて理由に気づいた。ユウさんのほうが、私より早く脱出できそうな気がしてきたからだ。でも、何故そう思うんだろう？その理由はわからない。アヤは決断した。今度の日曜日、ユウさんとデートしよう。そうすれば分かる気がした。

「ちょっとユウさん」

仕事終わりにアヤは祐輔に声をかけた。祐輔はびっしょり汗をかいて、体中から男の色気を放出していてちょっととまどった。

「な、なんでしょうか？」

この辺りは相変わらずなのよね、と思う。何人かがアヤではなく祐輔に

「お疲れ様でした」

と声をかけて出て行く。慕われてる、とアヤは羨ましくなった。

「あ、あのね」

つっけんどんに言う。

「ここ、今度ね、日曜日。私と一緒に食事に行かない？」

返事も待たずに付け足す。

「お、おいしいイタリア料理屋があるのよ。もう予約してあるから、じゃあ日曜日の午後六時にここのカウンター前ね」

と言うとじっと見つめた。祐輔のほうもドギマギしている。勘違いしてからに・・。
「い、言っとくけどこれはデートじゃないからね、ただリゾットを二人で食べるだけだからね！いいでしょ？」
祐輔は即座に
「もちろんです」
と返事を返してきた。アヤは胸がときめいたのを覚えた。
「うん！じゃあ待ってるからね！」
と言ってアヤは小走りにそこを去った。

風呂に入っている祐輔の顔は真っ赤であった。ちょうど隣にタコがいたが、両者の顔の赤さは互角である。
「おいユウさん、もういい加減上がったほうがいいんでない？」
とキリンのリンキーに声をかけられても祐輔の耳には入らない。別に顔が赤いのは湯加減のせいでもないのだ。アヤに、デートに誘われた！この事実だけでもう胸がたぎって仕方ない。それ以外のことは現在考えられない。隣のタコスは、一人にやついている祐輔に、
「何かいいことあったのかい？」
と聞いた。祐輔は
「あったんですよ、それが！」
と大きな声で返事した。
「なにがあったのさ、教えてくれよ」
とタコスは興味本位で聞いたが、祐輔は一瞬考えて、
「すみませんが内緒で、ウフヒ」
「なんでぇ冷たいな。ま、いいか」
とタコスは風呂から上がっていく。祐輔は一人さっきの会話を反芻していて、ハッとなった。イタリア料理とか言ってたな。まずい、服が無い。祐輔の服は最初に着てきた服と、支給されたダサいシャツやズボンしかない。まずい、どうしよう、そうだ、ロージャの服、いや、ロージャは細いし身長も俺より低い。どど、どうすれば、よ

し、取り合えずロージャに色々相談しよう、祐輔は勢いよく湯船を出た。

ロージャは我が事のように喜んでくれた。実はとっくに祐輔の気持ちに気づいていたが、こちらから言うのもなんなので黙っていたのだと言う。その心使いに感謝し、正直女性と二人きりのデートなんてほとんどしたこと無い、と正直に告白すると、何も心配ない、そのままでいい、飾り立てると却って損だとこの二十五歳の陸軍上がりの好青年は言う。祐輔よりは遥かに恋愛経験のありそうなロージャが言うのだからそうなのだろう、と祐輔は思った。ロージャは鼻も高く、彫りも深い典型的な白人顔だ。本人は全く自慢に思ってないようだが。ふと、ロージャが悩みだす。どうした？と聞くと、ロッテラダム市街にラブホテルはあるのだろうか、ここでは彼女がいないから使ったことが無いから知らない、などと言うので、慌てて何を言うんだ、馬鹿か、と言うとハハハハと笑った。これがアメリカンジョークなのか、と思った。ロージャには他にも様々なアドバイスを受けた。が、ともかく知識と実践は違う。祐輔の不安は解消されないのだった。

そして、その日が来た。祐輔ときたら朝から緊張の余りトイレに何度も行く始末。ロージャが心配してまず散歩にでも行って気を紛らわそう、と言うので市街をほっついたが、余り変わらない。ロージャがこうなったら少々酒でも引っ掛けようと言うので、昼間からやっているジャズバーへ入ったがビールの一杯や二杯では全く酔えない。酔えないけれど、まさか酒臭い息で酔いつぶれて行くわけにも行かず、後はコーラを飲んで流れるジャズに耳を傾けていた。ロージャは酔ったらしく、口笛を吹いてムードを楽しんでいる。祐輔は、唯一付き合った彼女のことを思い出していた。あの子も、酔狂にも祐輔に好意を寄せて何度も二人でデートし、付き合うことになり、そして、新しく好きな人が出来た、と一方的に振られた。ロー

ジャがそろそろ帰ろうと言うのでジャズバーを出て、二人歩いて大部屋に帰った。もう時間は無い。Ｇｏｄ　ｂｌｅｓｓ　ｙｏｕ！と祝福の言葉と共に、祐輔は待ち合わせの場所に向かった。と、言ってもいつものタツノのカウンター前なのですぐそこなのだが。驚いたことに、十五分前に出たのにもうアヤがいるではないか。

「は、早いね」

と言うと、

「先に来て待つのを楽しみにしようとしてたのに、もう来ちゃったの」

と言うとアヤはくすっと笑った。

「行きましょう」

今日のアヤはコートを羽織り中には上品そうなセーターを着込んでいる。一方祐輔はと言えば、ダサイダウンジャケットに上下トレーナーにチノパンだ。気後れして黙っていると、アヤが一人でしゃべりだす。

「私はトウキョウに住んでいたのよ、秋品ってところ。ユウさんは？」

祐輔ははっとした。偶然なのだろうが、同じか。いや、人口１２００万人のマンモスシティーだからさほどでもないか。

「俺もトウキョウだよ。同じだね」

と言うとアヤは嬉しそうにした。余りの可愛らしさに祐輔は、満足と戸惑いを覚えた。満足は、こんな子にデートに誘われた、と言う事と、戸惑いは、今日これからこの子を楽しませることが出来るだろうか、と言う事であった。そんな祐輔をよそに、アヤは一人で喋っている。聞いてればいいか、と祐輔は聞き役に回った。

アヤが連れて来てくれたイタリア料理の店は「ジョルノ・ブチャラティア」と言う名前だった。どこかで聞いた名前なのだが、思い出せない。店内は暗い基調だが、祐輔にはそのほうがなんとなく良かった。カマキリのウェイターに案内されて、奥まったテーブルに

座る。予約済みだったらしく、テーブルにはナイフもフォークも並べてある。端から順番だったな、と祐輔はロージャの言葉を反芻していた。
「ここのカルパッチョもリゾットもパスタもとてもおいしいのよ」
とアヤは笑顔で言う。今にもペロリと舌を出しそうだな、と思った。
「イタリア料理なんか食べに来たことないよ」
と祐輔は正直に言った。
「あら、私もあっちの世界ではほとんど食べたことなんてなかったわ」
アヤはそう言う。祐輔はアヤが元の世界でどんなだったかは大体想像はつく。もててもてて楽しい毎日を送っていたことだろう。と、そのひがみ根性に舌打ちし、店内を見渡す。早速オードブルが来る。
「ナランチャ・カポナータでございます」
と言われる。トマトやオニオンなどを胡椒やオリーブ油で炒めた物で、癖はあるもののおいしい。あっという間に平らげてしまって、品がなかったかと焦った。アヤも何も言わず黙々と食べている。そ、そうだ、飲み物を・・と思ったらウエイターが既に白ワインを開けて入れてくれていた。
ワインは回すんだっけか。それとなくそういうそぶりをして軽く振ってみると、アヤが笑って、自分も回して口に含んだ。二人は目を合わせて笑った。次にコンソメ風味のスープが来て、モッツアレラチーズと季節のアバキオ風味サラダが来て、次のメインの黒豚のトリッシュ香草クリームソースまで一気に二人は平らげた。何しろ、日頃食べているのは宇宙食みたいな簡素で温かみのない食事ばかりだから、週に一回の外食はどうしてもこうなる。最後のデザートのミスター・ドルチェアイスなる物を食べながら、ようやく二人は息をついて、会話と白ワインを楽しみだした。
「おいしかった〜。超おいしいでしょここ」
「本当だね、味わって食べる料理と言う感じだね」

「普段が普段だしね。ね、お酒には強いの？」
「普通だと思う。下戸ではないけれど、飲みすぎるとまずい」
「じゃあゆっくり飲めばいいね。この後もう一件バーに行こうね」
なんていいながらアヤはさっさと白ワインを空にし、もう一本赤ワインを頼んだ。お金、と一瞬思ったが、何しろ使うあてがほとんど無い世界で、月三十万ゼニーも貰ってもあまる一方だ。ここの値段表は見てないが、今日は五十万ゼニー持ってるからまず心配ないだろう。二人は作業場の話をした。二人とも、あそこで作られている鉄製品がどこへ送られているかを知らない。
「どこに発注してるか知らないの？」
「名詞はほとんど無いの。それもどこだか全く分からないし」
「そう考えるとある種虚しくなるな。毎日あれだけ必死に作ってるのに」
「ね。分からないことだらけよね」
祐輔は程よく酔ってきたらしい。なんだかおしゃべりになってきた気がする。
「分からない事と言えば」
一旦切って祐輔は続けた。
「ここからの脱出方法なんだけどさ、この前カブスが脱出しただろう」
アヤもほんのり赤くなった頬でうなずく。アヤの今日の目的も実はこの話にあるのだが、それは祐輔は知らない。
「どうも、改心して、嫁さんへの懺悔を言うようになったのが原因だと思うんだ」
へーっ、とアヤは感嘆する。
「つまり、働き者になるのがまず一つ。そして、もう一つはアヤさんが言った『意思』。この二つが揃えば抜け出せるんじゃないか、と思う」
「まだ足りない。」
アヤは間髪入れずに言った。

「足りない、と言うかその意思は一種類じゃないんだと思うの」
祐輔は激しく瞬きした。一種類じゃない？
「じゃ、じゃあそれは何と何だと思うの？」
アヤの頭の中が整理されてきた。
「きっと、一つは自分が目標や夢を持って叶えようとする事」
祐輔は息を呑んで次の言葉を待った。そして、何かが頭に閃いた。
そして、それをアヤが言葉にした。
「もう一つは、優しさや思いやりを持って周りの人と仲良く助け合うこと」
「そうだ！僕もそう思っていたんだ今。カブスは最初から鷹揚としていたがそれを持っていた！」
その瞬間、室内が猛烈に明るくなった。凄い勢いで窓も無いのに風が舞い込んできた。
「なんだっ！？」
と、祐輔が叫んだ瞬間、意識が無くなった。

第六章　アヤ

「よくここへ辿り着いた。さぁ、最終試験の時間だ。」
声にハッとした。祐輔は古ぼけた椅子に座っている。横にはアヤもいた。アヤも意識はあるようだ。声の主は、と前を見ると、白髪の、白いローブを纏った老人だ。空は相変わらずの色で、老人の背後には大きな和風の長屋がある。まだここは異世界のようだ。
「最終試験って、なんですか？」
アヤがはきはきと質問している。祐輔はまだほんのり酔っている。
「君達は、たまにいるのだが、二人同時に『見つけ出した』からサービスで二人一組にしてあげるが、内容は難しくない。今見えているこの長屋の奥にまで辿り着けば、そこから元の世界に帰れる」
古びていて、しかもかなり長そうな奥行きだが、このお化け屋敷みたいなのの奥に元の世界への帰り口があるのなら、入るしかない。

「私たち、見つけ出したの？」
とアヤが聞く。
「そうだとも。キミたちが、あちら側で見失った物、かつては知っていた物を取り戻したのだ」
老人はそう言ってにこやかに笑った。
「今のキミたちなら、きっとクリア出来るだろう」
そう言うと老人は指さして促す。祐輔は勢いよく立った。戻ろう、その時が来たんだ。アヤと二人で頷く。
「じゃあ行きます。お世話になりました」
自然と、二人の口からこのような言葉が出た。老人は黙って微笑んだ。二人は、長屋の引き戸を開けて中に入った。暗く、空気が冷たく淀んでいる。玄関は無く、靴で歩行できる石畳風の廊下が続いている。アヤは、半歩下がって祐輔にくっつくように歩いている。天井には発光の弱い蛍光灯がたまにある程度だ。左右には障子閉めの部屋がずっと続いている。開けてみたいような誘惑にかられたが、その必要は無いと首を振る。
「本当にお化け屋敷みたい。何か出そう」
とアヤが呟く。
「ただでは出れないんだろうな。最終試験と言っていたからには」
祐輔は、気合を入れなおす。ふと、目をやると、前から何かが来る。思わず身構える。アヤは祐輔の腕にしがみつく。立ち止まって、来る相手を凝視する。包帯を全身に巻いたミイラ男のようだ。暗いので顔の表情は見えない。五歩ほど手前で彼は止まり、こちらを見ながら問うてきた。
なんじら、なぜ、生きんとす？　やがて醜く朽ちて土に還るというのに・・・
「俺は、与えられた生を精一杯生きるんだ、自分のためにも、周りの人のためにも！」

「私もよ！もう、夢があるの！絵を描くのが好きなの！それが私に与えられた運命だからやるの！」

ミイラ男は一瞬黄金に輝いて消えた。その眩さはただ事ではなかった。二人は、祝福されたような気がした。祐輔とアヤは目を合わせてほっとした。行こう、前へ。二人は更に歩いてゆく。すると、今度は前から痩せこけた、腰に布を纏っただけの男がやってきて二人に言う。

理想は、しばしば踏みにじられる。正義は、実にしばしば虚仮にされる。

戻る世界の本質は無常なんだぞ、いいのか？

「そ、それでもいい。失敗しても、また立ち上がるよ。向かってさえいれば、いつかは辿り着くはずだ！」

「そうよ。もう諦めないわ。意思を失わず歩き続ければ、必ず成功するわ。成功しなくてもその努力に意義があるのよ！」

・・・・・無常は時に残酷で、世界を信頼するに足り得ない姿を二人に見せるぞ　いいのか？

「それでもいい。」

二人は同時に強く答えた。

いいのか・・・では、お前たちに早速その意味を教えてやろう！

痩せこけた男の体が突如、勢いよく膨らんで、筋骨隆々とした格闘家のようになった！そして、いきなり祐輔に襲い掛かった。祐輔に、あの時の決意が蘇った。次に戦う時は、絶対に負けない。俺の尊厳は、俺自身で守るんだ。格闘家が早い打撃で祐輔を後ろに吹っ

飛ばした。だが、祐輔はとっさに両腕で顔をガードしていた。即座に跳ね上がる。メガネは吹き飛んだ。同時に、アヤに叫ぶ。
「先に行けっ！コイツは俺が防ぐ」
言うと同時に頭から体当たりした。が、格闘家には効かず、祐輔はそこに立ち尽くして動けないアヤのほうに投げられた。アヤは思わず祐輔にしがみついた。
「離れてろ！怪我する、ともかく早く行けっ。」
アヤを振り払い、無我夢中で格闘家に殴りかかる。が、人を殴ったことなど無い祐輔のパンチは空を切り、強烈なカウンターを頬に食らってしまった。絶望的な衝撃。が、祐輔は全く折れない。すぐに立ち上がった。接近して、格闘家に組み付く。アヤがやめてぇ！と悲鳴を上げたのが聞こえた。祐輔の体は空に浮き、受身を取れず背中から石畳に叩きつけられた。格闘家はそれを見て、アヤに言った。

どうした、自分だけ逃げたらどうだ　あちらの世界に帰りたいだろう？
それともお前も殴られたいのか？

「殴るなら殴れ！ユウさんを置いて一人だけなんかじゃ帰らないよ！」
アヤは泣きじゃくりながら格闘家に向かっていった。格闘家は容赦なく拳を出そうとした、が、足に何かが絡まって動けない。見ると、失神したはずの祐輔が必死に絡みついている。アヤの足は止まった。格闘家が何発も祐輔の顔を殴る。みるみる鮮血が飛び散る。が、祐輔は力を弱めない。遂に、格闘家はバランスを崩し、尻餅をついた。すると、祐輔からすり抜けすぐに立ち上がり、距離を取って言った。

見届けたぞ、二人の覚悟　非情で残酷でもある世界で、もっとも

美しいものを見せてもらった

格闘家は突如眩く光り輝いて虚空へ消えた。同時に、祐輔の傷は癒えた。

「ユウさん・・勝ったね！今回は！」

アヤが大喜びで抱きついてきた。

「ああ、勝てた・・・・・・のかな」

祐輔もアヤを抱き返した。二人はしばらくそうしていた。

「あっ。向こう」

ふと、祐輔が気づいた。廊下の奥に、かすかな光が見える。

「出口よ！試練は終わったんだわ。」

アヤが立ち上がる。

「帰りましょう」

と、祐輔と手をつなぐ。

「ああ、帰ろう」

落ちた眼鏡を拾いながら祐輔も言う。

「向こうに帰ったらコンタクトにしよう」

「向こう、現実に帰ったら」

アヤはそっと言う。

「帰ったら？」

祐輔が聞き返すと、アヤは

「また、会え、」

そこまでアヤが言った瞬間、足元に穴が開いた。

「きゃああーーっ！」

アヤが穴に吸い込まれる。とっさに祐輔はアヤの片手を両手で必死に掴んだ。凄い勢いだ。祐輔ははいつくばって必死にアヤを持ち上げようとするが、途轍もなく重い。アヤも必死に穴から這い出ようとするが、出れない。

「なんだっ、お前らはっ！」

大きく広がった穴の奥から、次々と真っ黒な何かが浮き上がってきて、アヤの足にしがみつく。アヤを引きずり込む気か！

「ユウさん、助けて！」

アヤは目に涙を滲ませている。祐輔も歯を食いしばって全身全霊の力を出してアヤを引っ張るが、次々と増える真っ黒な生き物の数は増えるばかりだ。祐輔はそれらがここでタツノらに無残に殺された霊たちなのだ、と理解できた。アヤにもそれはわかった。彼らの嘆きが伝わってきたからだ。

死にたくなかった・・・・・・まだやりたいことがあった・・・・・・なぜ、どうして俺たちだけ・・・・・・

お前たちだけ出て幸せになるなんて・・・・・・許さない・許さない・憎い・憎い・憎い・・・・・・

祐輔は歯を食いしばってアヤを掴みながら、必死に涙を流して彼らに話しかけた。

許してくれ、俺たちはまだ生きなきゃいけないんだ、行かせてくれ、君らの分まで精一杯生きる。君らのような無念の死を少しでも減らすような世界にする、約束する、だから、だから、

許さない・憎い・許さない・憎い・・・・・・

アヤが

「ユウさん、もういいよ！このままじゃ二人とも引きずりこまれる！あなただけ逃げて！」

祐輔は絶叫した。

「絶対に離すもんか！絶対にだ！」

祐輔は悪霊たちに懇願した。

じゃあ、俺を、俺だけを引きずり込んでくれ、お願いだからこの子だけは許してやってくれ。俺はろくでもない人生を歩んできたし、ここで人生終わってもいい、でも、この子はまだもっと若いんだ頼む、この子だけは、アヤだけは守ってあげたいんだ、頼む、頼む、頼む！

瞬間、全てが眩しく金色に輝き、そして急速に暗闇が訪れた。

エピローグ　ほら、会えた

気がつけば、祐輔はアキハバラの街に立っていた。目の前に、あの老易者がいる。

「お帰り。どうだ、欲しかった物が手に入ったろう？」

祐輔は、全てを理解した。試練を終えて、脱出に成功したのだ。

「ああ、おかげさまで・・・・・・」

服装、持ち物、全てがあの時のままらしい。半年ほども向こう側にいた気がするのだが、こちらの世界ではなかった時間になるのか？

「これ、持って行きなさい」

それは、「あのメモ2」だった。もう、そんなものに全く興味は無い。

「いいよ、ありがとう。それじゃあ俺は帰る。」

「気をつけてな」

祐輔は、家に帰った。自分の部屋も、両親も、何も変わっていない。だが、祐輔本人は変わった。

「祐さん、どうしたの！？」

と母親は祐輔が痩せてしまった体になっているのに驚愕したが、本当の事を言ってもどうせ信じてもらえまい、と思って言わなかった。

祐輔は翌日から就職活動をし、またＩＴサーバーの管理会社に就職した。出来ることはこれしかないし、体力も気合も満ちている。続けられるだろう。

新しい日々が始まった。その間、一日としてアヤのことを忘れたことはなかった。アヤも、無事にこちらの世界に帰ってこれたのだろうか。ある日、あの易者に聞こうと思って、またアキハバラに行ったが、もういなかった。なす術がない。もう会えないかな、仕方ないな、と思った。そう思いながら大通りの交差点を歩いていたら・・・・・・

「ほら、会えた」

と正面から歩いてきた子にいきなり話しかけられた。それは、及川綾だった。

「どうしたの、変な顔して」

と、アヤは祐輔の腕に組み付きながら言う。

「ああ、あのその、お互い無事でなにより、」

と祐輔は、とっさのことなので、しどろもどろでアワアワ言っていると、

「言ったでしょう、またこっちでも会いましょう、って」

祐輔は思い出していた。が、それを聞く前にアヤが穴に落ちたんだったっけか。祐輔があの時のことを思い出していると、

「ちょ、ちょっと、まさか勘違いしてるんじゃないでしょうね！私は、今日はたまたま、買い物に来てただけなんだから、待ち伏せてもらってたとか思ってニヤニヤしないでよね！」

この子のツンデレは治らないのだろうか、と祐輔は空を見上げた。雲の切れ間から太陽が指してきた。忘れてはいけないことを、胸に刻んで、明日からも生きようと思った。（終わり）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4573f/

Spirited away

2010年11月12日16時26分発行